



チャンク音読が読解効率に与える影響 Influence of Chunk Reading Aloud on Reading Efficiency

外国語教育メディア学会(LET)関東支部130回(2013年度)研究大会
2013年6月8日 東京農工大学(小金井キャンパス)

鈴木 政浩(西武文理大学)

神田 明延(首都大学東京)

湯舟 英一(東洋大学)

山口 高嶺(早稲田大学)

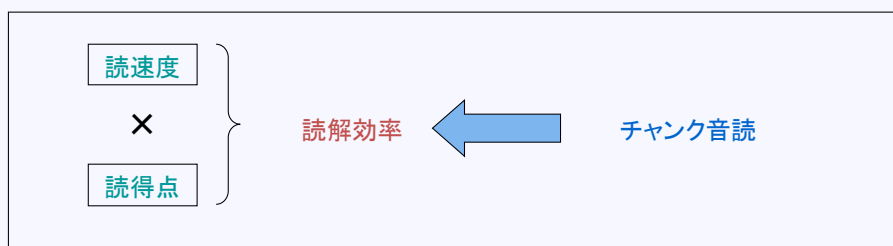
田淵 龍二(ミント音声教育研究所)

池山 和子(恵泉女学園大学)

本研究は科学研究費基盤C 課題番号24501196「英文速読能力を向上させるチャンク音声提示法の研究」による。

研究の目的

チャンク音読が読解効率を構成する読速度と読得点にどのように寄与しているのかを検証すること



用語の定義

チャンク音読が読解効率を形成構成する読速度と読得点にどのように寄与しているのかを検証すること

チャンク	朗読音声をポーズで区切ったもの (Breath Group)。4秒を越えるなど長いものは分割した。
チャンク音読	ネイティブ収録音声をチャンクごとに反復提示し、強調表示されたチャンクを音読する活動。
読解効率	読速度に読得点の正答率を乗じたもの
読速度	課題文の単語数／黙読読解に要した時間(wpm)
読得点	読解スコア (課題文の黙読読解後提示した設問を採点した得点)

音読方法と技能の関係

- リーディングと音読の関係
- リスニングと音読の関係
- Reading While Listeningの効果(Chomsky,1978)
- リーディング、音読、フレーズ(Kuhn & Stahl ,2003;Klauda & Guthrie,2008)
- 読解効率(リーディング指導の効果に関する一指標)(Fry, 1963)
- コンピュータソフトの効果(McCurdy et al. ,2007)

研究の経過

- いくつかの提示法の提案と効果の検証
(神田他, 2007; 2009; 湯舟他, 2007; 2009)。
- チャンク毎に英文を提示することで、有意な成績の伸び
- 韻律が意味の切れ目を暗示することで読得点に寄与する
(神田他, 2012)

方法 対象者、実施期間、分析方法

対象者	東京・埼玉の大学生157名
実施期間	2012年4月から7月まで

分析方法	<ol style="list-style-type: none">1. 読速度と読得点の伸びをPre,Postで分析(分散分析:混合計画)2. プレーヤーミントを使用し、チャンク音読に取り組む群とチャンク黙読に取り組む群で読解効率の伸びに違いがあるかどうか、読解効率と他の変数との関係があるかを分析(分散分析:混合計画)3. Preテスト得点に有意差のなかったB群とC群で、読解効率得点の差を比較(分散分析:混合計画)4. 事前事後アンケート(「意味の切れ目(チャンク)を意識しながら読んでいる」上位群下位群の読解効率得点比較)
------	--

方法

対象者の情報

表 1 対象者の情報

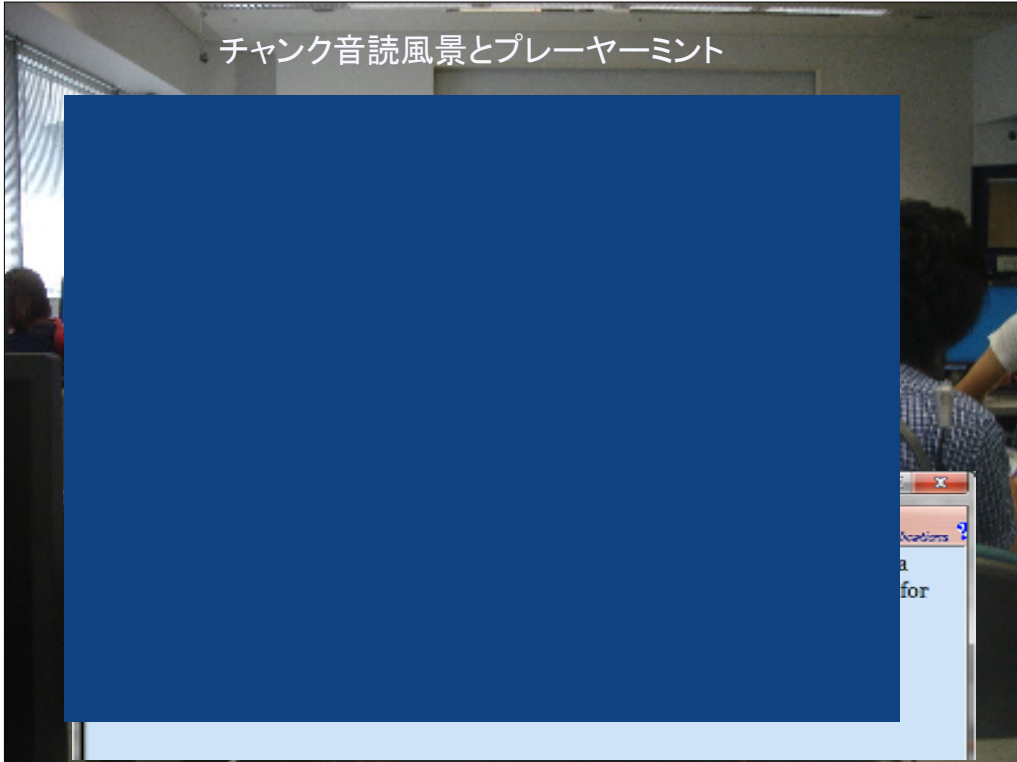
群	処遇	Preテスト平均値	標準偏差	n
A1	チャンク音読(授業者1)	31.82	3.96	34
A2		22.45	5.88	47
B		24.43	6.59	40
C	チャンク黙読(授業者2)	25.72	4.43	36

有意差なし

- ※1 A1とA2は同一大学。A1と他の群、A2とCには有意差が検出された。
- ※2 チャンク音読、チャンク黙読ともに30分程度。
- ※3 群分けは発表者らが担当した授業によるもので、研究仮説にもとづくものではない。

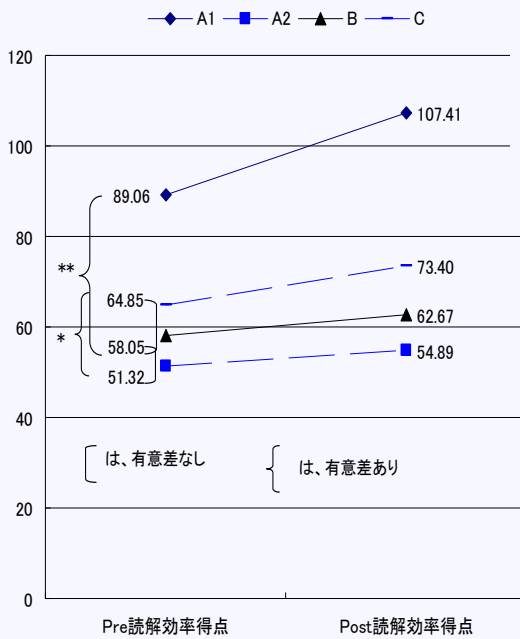
要検討

チャンク音読風景とプレーヤーミント

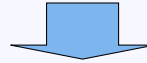


結果(1)(2)と考察

読解効率Pre,Post4群の比較(分散分析)



- 1.A1の伸びが顕著で交互作用が有意
 $F(3,153)=4.138, p<.01$
- 2.B群とC群については主効果のみ有意
 $F(1,74)=7.14, p<.01$

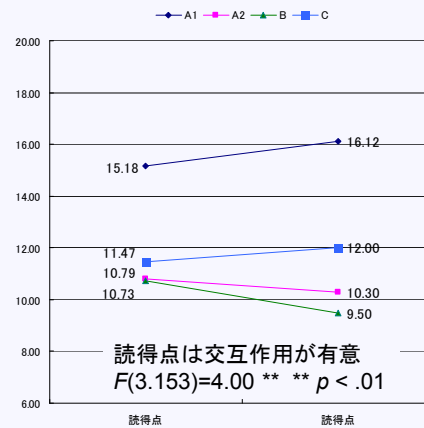
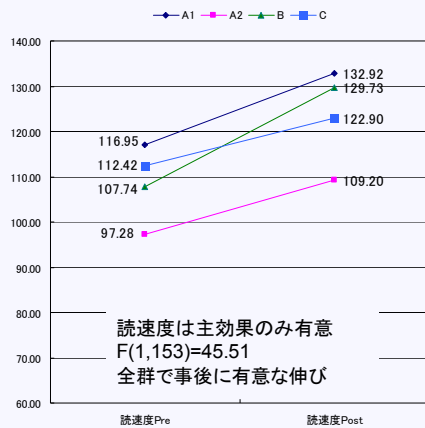


1.いずれの処遇においても全群で伸びを観測。ただしPreテスト得点の高い群の伸びが特に顕著
→到達度の高い群に顕著な効果

2.到達度の低い群では、チャンク音読とチャンク黙読の効果の差は検証できず

読得点・読速度Pre,Post比較

読解効率の伸びは主として読速度の向上によるものか



9

読速度が全群上がったにもかかわらず、B(チャンク音読)は読解効率が減少→下位のクラスでは読得点の下降(空読みが生じた可能性)

結果(3)と考察

質問(事前): 意味の切れ目(チャンク)を意識しながら読んでいる

そう思う

5・4

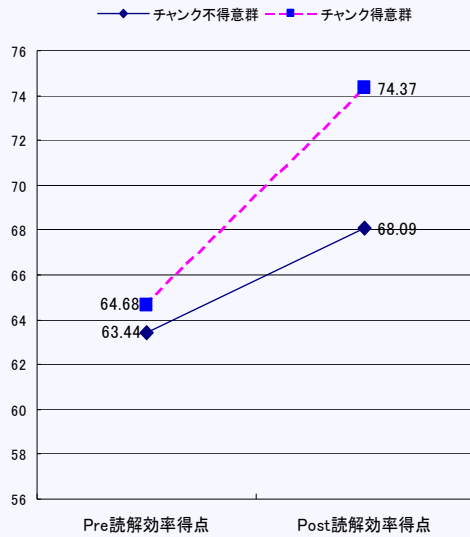
vs

3・2・1

そう思わない

(上位群 n=110)

(下位群=47)



3. 読解効率得点(事後)は、チャンク得意群と不得意群の間に有意な差は認められなかったが、チャンク得意群の平均値が若干高かった。



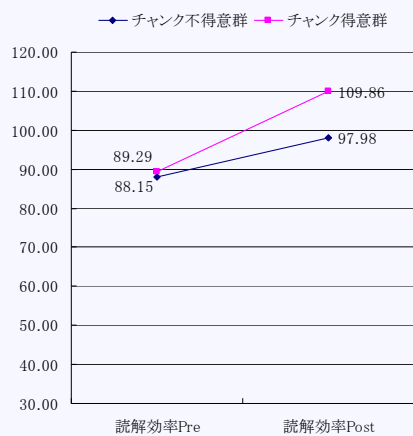
チャンクに対する意識づけの指導

をするかどうかで事後の読解効率に差が生じる可能性を示唆(Preテスト得点との関連はなし)。

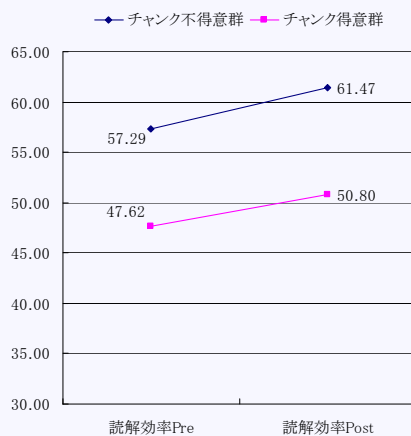
補足資料

チャンク得意・不得意別読解効率の伸び

A1群



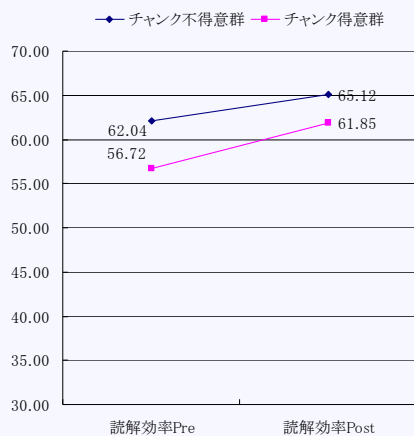
A2群



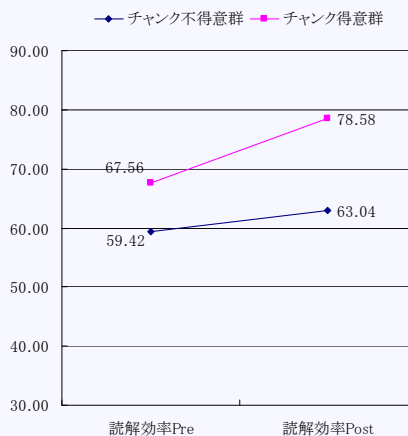
補足資料

チャンク得意・不得意別読解効率の伸び

B群



C群



今後の課題

- 1.到達度上位群におけるチャンク音読処遇群とチャンク黙読群の違い。
- 2.到達度下位群でチャンク音読の効果を検証する処遇。

参考文献

- 神田明延, 湯舟英一, 田淵龍二 (2007) 「個別学習と連携したソフトウェアによる速読訓練」『外国語教育メディア学会LET 第47回全国研究大会発表論文集』pp32-33.
- 神田明延, 湯舟英一, 田淵龍二, 鈴木政浩 (2009) 「ソフトウェアのチャンク提示法による速読訓練の効果」『第49回LET全国研究大会発表論文集』pp.84-85.
- 神田明延, 山口高嶺, 湯舟英一, 田淵龍二, 池山和子, 鈴木政浩(2012)「音読訓練による読解力の変化と学習者の自己評価分析」外国語教育メディア学会(LET)関東支部第129回(2012年度第2回)研究大会
- 湯舟英一, 神田明延, 田淵龍二 (2007). CALL教材における英文チャンク提示法の違いが読解効率に与える効果. *Language Education & Technology*, 44, 215-229.
- 湯舟英一, 神田明延, 田淵龍二. (2009). CALLによるチャンク提示法を用いた英文速読訓練の学習効果, *Language Education & Technology*, 46, 247-262.
- 鈴木政浩(2011)「大学における音読指導がリスニング能力に与える影響—コンピュータ・ネットワークを活用したdecoding skillsの育成—」『サービス経営学部研究紀要』第18号, 111-123. 西武文理大学
- Chomsky, C. (1978) After decoding: What? *Language arts*, 53, 288-296.
- Klauda, S.L., & Guthrie, T. (2008). Relationships of Three Components of Reading Fluency to Reading Comprehension. *Journal of Educational Psychology*. 100(2), 310-321.
- Kuhn, M., & Stahl, S.A. (2003). Fluency: A Review of Developmental and Remedial Practices. *Journal of Educational Psychology*, 95(1), 3-21.
- Fry, E. (1963). *Teaching Faster Reading: A Manual*. Cambridge University Press.
- McCurdy, M., Daly, E., Gortmaker, V., Bonfiglio, C., & Persampieri, M. (2007) Use of Brief Instructional Trials to Identify Small Group Reading Strategies: A Two Experiment Study. *Journal of Behavioral Education*, 16(1), 7-26.